

(注) この出題の趣旨はホームページに掲載した問題に拠っています。

問題の構成と内容の概観： テキスト（第5版）、第8章で示しているように、問題構成は4部構成になっており、正誤選択問題（第1問）、収益性の問題（第2問）、安全性の問題（第3問）、投資の問題（第4問）となっています。第1問は、第2問、第3問、第4問で扱えなかった事項からの出題で、広く決算書分析の知識を問う問題になっています。

それぞれの具体的な内容とテキストによる学習の方向づけは次のようになっています。

第1問は、決算書アナリストとして、決算書分析の全般の知識を問うています。テキストに沿い、復習のために、各問の該当のページを先ず掲げておきます。

1. 29～31 ページ
2. 18 ページ
3. 44～45 ページ (14 ページ)
4. 18 ページ
5. 39 ページ
6. 48 ページ
7. 19 ページ
8. 64 ページ
9. 66 ページ
10. 70 ページ、および、考え方として、第2問、問3

1は、分析方法の利用法、2から4は、決算書作成側に立った決算書の見方、5は、分析指標の見方、6は、分析指標の作成法、7と8ならびに9は、次の問題（第2問から第4問）で取り上げなかった財務諸表・キャッシュ・フロー計算書の見方に関わる問題、10は投資に係る問題です。これらにより、決算書分析の問題として総ての分野の知識を習得しているかを問うています。

第2問は、収益性（テキスト、第4章）の問題です。ここでは、実際の数値に触れることも意図しています。

同業の2社を比べ、両社の収益構造の変化を時系列的に分析しています。収益性の分析として、総資産当期純利益率からはじめ（問1）、利益率（総収益当期純利益率）と回転率（総資産回転率）に分け、収益構造を分析しています（問2）。計算の結果、両社とも収益性が改善していますが、この改善には、利益率の改善が貢献していることが分かります。さらに見ると、P社の回転率の動きに、変化のないQ社と比べて気になる動きがあり、その原因も問うております。

最後に、企業にROE8%が求められている中、ROEの視点での両社の評価を問うており（問3）、これが総資産当期純利益率で見た場合と比べ逆転していることを知ったうえで、その原因が資本構成にもあることに誘導し、収益性だけでなく、資本構成がROEに与える論理を問うております。

第3問は、安全性（テキスト、第5章）の問題です。

まず、安全性を構造的・長期的視点と短期的視点から分析しています（問1）。これらの分析を受け、それらが出た理由を、貸借対照表を見て分析しています（問2）。つまり、決算書を見る能力も問うています。

これらを受けて、企業の分析では、安全性と収益性の分析が車の両輪であることを指摘し、問題を終わっています。

第4問は、投資（テキスト、第6章）の問題です。ここでは、分析においては、趨勢分析に興味を持ってもらうことが必要であることを意識するとともに、株価分析に必要な指標を計算しています（問1）。これを受けて、株価を見る場合の貸借対照表のどの部分が肝要かを問うとともに、株価の判断の仕方を問うています（問2）。

以上の諸問により、株式投資に必要な知識を問うています。

総括として、問題は、単に指標を丸暗記し、求められた指標計算をするのではなく、問題文を理解し、この中で扱っている現実の企業経営の姿（第2問、第3問）および株式市場からの企業の評価法（第4問）を学んで欲しいという意図を込めて作成しています。この意味で、試験が終わってからも、問題文を思い出して復習して欲しいと望んでいます（問題はホームページに掲載しています）。また、各問は独立ではなく（言わば問題のための問題ではなく）、関連を持つことを意図し作成しています。

最後に、テキストは、第2部で、試験に関わる知識の説明に留まらず、更なる学習への誘導もしています。これは、企業経営管理に関わる幅広い知識を習得して欲しいという願い（趣旨）に基づいています。この部分は、決算書分析に関わる類書と違うテキストの特長であります。試験後、この「趣旨」を参考にし、第1部を復習することはもちろん、第2部まで学習を展開してもらうことを願っています。

なお、目下、解説を加えた過去問題集の発刊の企画もあります。

【注意】一旦、入金された検定料は、理由に関わらず、お返ししませんので、ご注意願います。